

森林、流域に包まれた流れの  
中で、多くの生命が管みと続け、  
古来人々の生活を支え、文化や  
歴史を育んできた川 — そうい  
川を“生きた川”として維持し続  
けようにはどうすべきか”というこ  
とを考へて参らう。今後の紀の川の  
ありべき姿を探ることに  
考へていこう。

1983年に日本野鳥の会に入会してから毎年1月に行なわれる「ガン・カモ一斉調査」(カモの種類毎に羽数を数える)に参加してから、ずっと続けて調査しております。また、随時開催される紀ノ川流域の採鳥会では、色々な野鳥と生会い、その名称や習性などがたんだんと判かるようになりました。今後、とんを珍鳥に会えるか、意外な光景が見られるか興味が尽きません。

冬季、和歌山県には一万羽前後のガン・カモが飛来越冬しますが、その約40%程が紀ノ川に飛来します。県下で最も重要な越冬地です。

また初夏には船戸のサギ山で、アオサギ、コサギ、コサギ、ダイサギなどが紀ノ川の豊富な魚を餌に繁殖します。

この自然豊かな紀ノ川が将来も清流であり続けられるよう努力しなければと思います。

私し、平成11年6月まで、アユに関係した仕事をいたしました。

本県の主要河川は、昭和60年頃から、天然アユの遡上が少なくなりました。

紀の川も同様です。原因は色々あり、はっきりいたしません。

毎年1月から海で特別採捕した海産稚魚を池で大きくして、その種苗を河川へ放流する事業を続けてまいりましたが、毎年思いました。放流した後に河川の水量が少なくなり、アユの生長が悪い年が多く、せめて、夏の風流アユ釣りの解禁(5月26日)の時まで、河川に安定した水量ときれいな水が流されるようになることを切望いたします。

委員名                    テレビ和歌山 古田 皓

紀の川との関わりといえば、19年前、昭和57年の台風10号を抜きにしては語れない。父親の勤務の関係から、和歌山県は昭和28年9月、未曾有の災害に見舞われたとは聞いていたし、昭和34年台風など関係のなかった北海道から和歌山県へきてから、伊勢湾台風や第2室戸台風など台風の風雨の凄まじさは、雨戸を角材で打ち付ける金槌音と一緒に「激しいもの」と体験していた。

しかし昭和57年の台風10号は、ようやく手の入れたマイホームが床下浸水しただけでなく、家族が緊急避難し、命すら……という事態に追い込まれたのだ。

私は仕事柄、この前日から夜を徹して台風情報をスタッフと一緒に放送して、夜半過ぎにようやく静かになった。当時はスタッフも少なく、災害の取材は、情報を送り出してからだった。

午前3時すぎ、北島橋から堤防上を上流に向かったが、河川敷はライトを照らすと、背の低い雑木が半分くらい水に浸かっていた。紀の川大堰から上流は堤防の8分近くまで水がきていて、車で走ってもこわい位だった。当時マイホームはこの上流の紀伊地区にあった。行ってみると、道の見分けがつかないくらい大きな湖になっていた。

後日女房殿に聞いてみると、当日午前零時過ぎに紀伊小学校へ避難して下さいとの呼びかけがあり、3歳の子供と一緒に非常食を持って外へ出たが、学校へ行く道は水におおわれて遅くらいまであり、両横はごうごうと流れる用水路で、暗く雨も強く心細い思いをしたとの事。「亭主なんて全くあてにならない」と生まれて初めて目覚めたごとくに、まくしたてられた。

こっちも別に放っていたつもりでないが、この事件をきっかけに私は家庭で緊急時にはあてにならない人との烙印を押されたわけです。

私事はさておき、このあと紀の川を調べていくといろんな事がわかってきました。致命的なことはこの川は和歌山市内にたいしては天井川になっていることです。そんな意味では紀の川大堰の完成、肉眼で見える堰本体だけでなく、普段は見れない河床掘削も含めて岩出大堰まで整備されると、私も家庭を放り投げていた？償いができるのではないかと考えています。

しかし河川流域の町々の安全性を高めるということは、まだまだ手がついていないのが現状です。紀の川にまだ無堤防地域があるのも現状です。

自然を残すのも確かに大事なこともかもしれませんが、本当の自然に人類はどれだけ絶えられるのでしょうか。山や川をなだめ、治めながら営々と文化を築いてきたのではないのでしょうか。大手マスコミはよく他地域との比較をしますが、人間の決めた事と違い、自然はそれぞれに地域地域の細かい特性を持っています。紀の川も例外ではありません。それらについてきめ細かく知り、理解したうえで論議を望みたいと考えています。

私と紀伊川と「あつかり」は、国際生物事業計画 (IBP) の吉野川 (紀伊川、奈良県側) の生物生産力の測定が始まった昭和40年頃から始まりです (当時、私はまだ大学院の学生で、奈良女子大学、津田松岡先生とのあつかりからこういうことになりました)。

当時から痛感して来たことは紀伊川の生物にかかわる資料は少ないが、橋本まで行くと、橋本より下流側は資料不足で、とくに海水が混入している汽水域にいたっては生物相の記載さえも、足りなされていませんでした。

その後、約50年が経過したにもかかわらず、まだ未だにこの感想は解消されておられません。

要約的な言ひ亦となりますが、紀伊川は、人のあつかりの中で存在してきた永い歴史をもっており、本来の川を、また、このことと念頭において開発されていくべきかと痛感しております。